

江戸幕藩体制下の教育とその思想

—幕府の学問所、諸藩の藩校、そして、私塾・寺子屋—
(近代公教育への礎と萌芽の歴史的検証)

木 本 毅

江戸幕藩体制下の教育とその思想

—幕府の学問所、諸藩の藩校、そして、私塾・寺子屋—

(近代公教育への礎と萌芽の歴史的検証)

The Education under the Tokugawa Shogunate System

-Schools of Edo Shogunate and Schools established by

Local Domains -

(Historical Verification of the Education in Edo and

Its Role as the Foundation for the Modern Public

Education started in Meiji-era)

木本 毅

Tsuyoshi Kimoto

《abstract》

In Edo period (1603-1867) Tokugawa Shogunate (bakufu) positioned Confucianism (Jugaku), especially Neo-Confucianism (Shushigaku) as the core of learning and education. Confucianism is a philosophical wisdom and code founded by Confucius and other Confucians in ancient China. It is a philosophical teaching regarding ethical code and value in human life. Confucian ethics like humanity and justice and loyalty to master and filial piety thus became the central core in the education of Edo-era. Ieyasu Tokugawa, founder of Edo Shogunate, now civilian-government oriented in mind, came to put so much value on learning and education for the ruling class. He himself began to learn from Seika Fujiwara, the prominent scholar of Confucianism, and also from Razan Hayashi, top follower of Fujiwara school. He fully understood that the learning is indispensable in ruling the country, consequently the study of Confucianism and Neo-Confucianism were inevitably recommended. In 1797, Tokugawa bakufu opened Shoheizaka Gakumonsho, government supported school, where mainly Neo-Confucianism was taught for the shogunate vassals and later also for the retainers dispatched from local domains. This played a leading role in propagating Confucianism throughout the country. After the government school, innumerable number of local domain schools (Hankou) were being established (over 300 schools), where Confucianism, especially Neo-Confucianism were mainly taught. Of course, before Shoheizaka school, over 120 domain schools had been founded by the progressive lords who

were enthusiastic about education, like Mitsumasa Ikeda in Okayama and Masayuki Hoshina in Aizu, who had been much influenced by the belief in the Confucian learning of Ieyasu Tokogawa. The Confucian education was fully taken over to the modern public education in the Meiji Restoration. The Imperial Rescript on Education was drafted by prominent Confucian scholars. The moral discipline (shushin) was compiled according to the Confucian moral codes. Chinese classics, which includes lots of Confucian and Neo-Confucian teaching materials, was one of the four major subjects in the curriculum. And Government schools were transformed into colleges and university, and many of domain schools into middle and high schools. So it is safely said that the education in Edo period played the significant role in starting the modern public education both in soft and hard ware phases. We can, therefore, conclude that the modern public education conducted in the Meiji Restoration was successfully achieved owing to the education in Edo period, government schools, local domain schools over 400 schools, and also private schools (Shijyuku) and temple elementary schools (Terakoya), though last two of which shall not be referred to here in this paper, but in another paper later on.

1 はじめに

我が国の近代公教育は、1872年(明治5年)の「学制」の発布に始まり、戦後の教育改革を経て、爾来150年の歴史を数えようとしている。

この近代公教育の成立と発展は、その礎を徳川幕藩体制下の教育すなわち幕府直轄の教育機関や諸藩の藩校さらには私塾・寺子屋の教育に負うところが大きい。すなわち、17世紀にはじまる近世の組織的教育が維新後の近代公教育の誕生・発展に大きく貢献している。こうした近世教育の発展・充実は、19世紀末の我が国の教育水準を鎖国というハンデイーを負う中にありながらも、近代自然科学分野を除けば、世界的にも遜色ないレベルのものであった。とりわけ、国民全体の知識・能力、識字率すなわち literacy は、欧米先進諸国を遙かに凌ぐものであった。

本稿では、我が国近代公教育の成立と発展を支えたファクターを幕府と諸藩の教育機関に絞って検証してみることとする。(私塾及び寺子屋の果たした大きな役割については、スペースの関係上、別稿で検証することとする。)

幕府及び諸藩の教育の中心は、近世に隆盛となる儒学・朱子学の学問である。戦乱下克上の時代を治める武断政治から泰平・安定社会を治める文治政治への転換および文治政治を支える徳治主義の哲学、確立された身分社会・支配構造を支える道徳律と君子・士大夫(幕臣、藩臣)の学問修養、こうした

歴史的・社会的ニーズに応えるものが、儒学・朱子学の学問である。とりわけ、「上下定文の理」に基づく「名分論」を説く江戸「朱子学」は、「儒学」とともに、徳川幕藩体制および人倫社会を支える原理として機能し、江戸近世教育の根本哲学理念として、幕府の官学となり、発展・深化を遂げた。

こうして成熟・定着した儒教価値観及び哲学は、明治の近代公教育にも引き継がれた。その理念、価値観は「教学聖旨」をはじめ「教育勅語」「修身」さらに「漢文教育」などに引き継がれた。同時に、幕府直轄学校は、帝国大学や高等専門学校に、多くの藩校は、旧制高等学校・中学校・専門学校等に移行するなど、システム面においてもその礎となった。さらに、戦後の教育改革においても、国語漢文教育に道德教育にその価値観は、伝承されるとともに、システム面においても新制大学、新制高校、新制中学につながるものであった。すなわち、江戸時代の幕府および諸藩の教育は、私塾・寺子屋の教育とともにわが国近代公教育の大きな礎となっている。本稿は、このことを歴史的に教育学の観点から検証するものである。

2 近世教育の芽生え—幕藩体制下の教育—

幕藩体制(1603—1867)265年間の教育は、幕府直轄の学府における教育と諸藩の藩校教育が、儒学を中心に大きな役割を果たし、我が国の近世教育をリードしてきた。

1593年、家康は、儒学者藤原惺窩を招いて、君子の理想的政治論を述べる「貞観政要」の講義を受け、徳治政治こそが豊かな安定社会を創るといふ哲学(「修身、齐家、治国、平天下」)を学んで、以来、儒学・朱子学に大きく傾倒していく好学の将軍であった。

《貞観政要》「為君之道、必須先在百姓。若安天下、必須先正其身。未聞身治國乱者。」「創業易守成難」「若安天下、必須先正其身。未有身正而影曲、上理而下乱者。」

1603年、武断政治で乱世を治め開幕の祖となった徳川家康(1542-1616)は、儒学・朱子学の哲学に則り、これからの泰平の世においては、将たる者(君子)は、武勇のみでなく学問に基づく人格の完成と修養に基づく政治が重要と考え、儒学・朱子学にそのよって立つ論拠を求め、儒教・朱子学の学問を大いに奨励した。

家康自身、近世儒学の祖で最高権威の藤原惺窩(1561-1619)に帰依し、惺窩の高弟林羅山(1583-1657)を侍講として、儒学・朱子学(「上下正文の理」「名分論」)を深く学んだ。

《論語》「温故而知新、可以為師矣」「君子不器」「為政以德、譬如北辰居其所、而衆星共之」(為政篇)「吾日三省吾身、為人謀而不忠乎、与朋友交而不信乎、伝不習乎」(学而)《孟子》「至誠而不動者未之有也」「天時不如地利、地利不如人和」「仰不愧天、俯不愧人」

《中庸》「忠恕違道不遠、施諸己而不願、亦勿施於人」「在上位不凌下、在下位不援上」

《近思録》「威儀行儀、以養徳也。推己及物、以養人也」「孟子曰、惻隱之心、仁也。後人遂以愛為仁。愛自是情、仁自是性。」

江戸期の学問の中核をなす儒学は、5世紀の頃、中国から王仁が「論語」を伝えたとする記述が「古事記」にあるが、当時は仏教が絶対的な力を持ち、儒教が大きく進展・普及することはなかった。この儒教が復活し大きな力を持つのは、南宋で興った朱子学(ネオ儒教)が日本に持ち込まれ(1211年、真言律宗僧俊芿)、臨済宗の禅僧により研究される南北朝・室町時代で、江戸時代に幕府の官学となり、その全盛期を迎える。

儒学は、人の学ぶべき徳性を仁、義、禮、智、信の「五常」とし、人間関係を父子、君臣、夫婦、長幼、朋友の「五倫」とする道徳律で、これらの徳を「四書(大学、論語、孟子、中庸)・五経

(易経、書経、詩経、礼記、春秋)」等を通して学ぶとともに、朱子学においては、社会の全ての営みが理(道理・条理・倫理・理念)に基づくという「理気二元論」「性即理」及び恭しく万物の理を窮める「居敬窮理」の哲学と「大儀名分論」(君臣の支配・服従関係論)に基づく社会の在り方を学ぶ学問で、封建社会の秩序形成と人倫哲学に係る理論である。

儒学者林羅山は、四代将軍まで侍講を勤めるとともに1630年、三代将軍家光から与えられた土地に塾舎を建て、これを「先聖殿」(1632)とし、幕臣に儒学・朱子学教育を施した。この時代、幕藩体制が固まり安定期に入ることから、幕藩政策は文治政策に舵を切り、儒学・朱子学教育が一層奨励され、その隆盛期を迎える。

1690年、五代将軍綱吉は、林家の塾舎・先聖殿を湯島に移し、増築・改築し、孔子の生誕地に因んで「昌平坂」と命名した。爾来、儒学は、社会秩序(身分秩序)、忠孝、礼節等の人倫および朱子学の「上下正文の理」「名分論」を学ぶ学問として公式に幕府の官学に位置づけられるのである。

八代将軍吉宗は、湯島の昌平坂の学問を幕臣のみならず広く庶民にも開放するとともに「六論衍義大意」(寺子屋の教育指針・教科書)を示し、儒学による士族・民衆の教化に努めた。1797年、老中松平定信は、朱子学を幕府の官学として他の学問を禁ずる「寛政異学の禁」を通過するとともに昌平坂の学問所を幕府の直轄の学府とした。幕府の学校「昌平坂学問所」の誕生である。そして、この学問所を幕臣すなわち旗本・御家人および後には各藩から選ばれた藩士の教育の場とした。ここで学んだ諸藩の藩士は、国元の藩校の指導者となり、昌平塾は指導者養成の役割も担うようになった。昌平塾の開校に倣って、この時期、諸藩では、雨後の筍の如く多くの藩校が続々と開校している。(300校以上)

このほかの幕府直轄の教育機関としては、江戸後期から末期にかけて、和漢医学のための「医学館」(1791)、国学研究の「和学講談所」(1793)、西洋語学・文化の「蕃所調所」(1856)、洋式操練の「講武所」(1856)、西洋医学の「西洋医学所」(1860)等が創設された。

3 江戸期の教育の根本哲学となる儒学・朱子学

江戸期の学問の中核をなすのは、儒学・朱子学である。儒学

は、人の学ぶべき徳性を仁、義、礼、智、信の「五常」と教え、そして、人間関係を父子、君臣、夫婦、長幼、朋友の「五輪」とし、こうした徳を「四書（大学、中庸、論語、孟子）・五経（易経、書経、詩経、礼記、春秋）」の經典等を通して学ぶ学問である。儒教の根本思想は、「仁」すなわち人に対する愛を最高道徳としている。

《「樊遲問仁、子曰愛人」「克己復礼為仁」（論語顔淵篇）「夫仁者己欲立而立人、己欲達而達人、可謂仁之方也」「仁者先難而後獲、可謂仁矣」（論語雍也篇）「温良仁本也、敬慎仁地也」（礼記）》

この仁は、積極的・行動的なものである。《「仁者不憂」（論語憲問篇）「力行近仁」（中庸）》

仁愛は、親しい者（肉親、年長者）への愛すなわち「孝」となり、「仁」が「孝」に基礎づけられる。《「孝悌之者、其為仁之本与」（論語学而篇）》

孔子は「孝経」において、父子間の「孝」の観念は、君臣の誼に適用されると「忠」の観念となるとしている。《「父子之道天性也、君臣之義也」「事親孝、故忠可移於君」（孝経）》

すなわち、儒教の最高道徳観念の「仁」「孝」から「忠君」の価値観が生まれるのである。《「忠臣求孝子門」（後漢書、十八史略）》

儒教は、紀元前3世紀の初頭の漢の時代に教学として大成し、我が国には4世紀の頃伝わったが、仏教に押されて、表舞台に出るのは泰平の世の江戸時代まで待たねばならなかった。儒学では、経書の学習が基本的必修である。経書には、「五経」「六経」「十三経（四書、五経、孝経、春秋三伝（左伝、公羊伝、穀梁伝）ほか）」と様々な分類と数え方がある。

《五経》

*「易経」世の陰陽により自然と人生の変化の法則を説明するとともに陰陽占術を著す。

「君子豹変、小人革面」「積善家必有餘慶、積不善家必有餘殃」「窮即変、変即通」「霜履堅氷至」「君子安而不忘危、存而不忘亡、治而不忘乱」「言行君子之所以動天地也。可不慎乎」「君子以多識前言往行、以畜其徳」

*「書経」儒教の理想的政治論。歴朝の聖王賢臣が徳を明らかにし、刑罰を慎み徳政を行なってきた様子を孔子が編纂した。

「満招損謙受益」「罪輕疑、疑功重」「作徳心免日休」「有其善、喪厥善、矜其能、喪厥功」「臨下以簡、御衆

以寬」「居上克明、為下克忠、檢身若不及」

「有其善、喪厥善、矜其能、喪厥功」

*「詩経」中国最古詩篇。3000余篇を孔子が311に再編。

「凱風自南、吹彼棘心」「我心匪鑑、不可以茹」

「維鵲有巢、維鳩居之」

「如切如磋、如琢如磨」「投我以桃、報之以李」

*「礼記」儀礼の注釈および政治、学術、習俗など禮に関する説を集録したもの。朱熹は、この中から「大学」「中庸」を取り出し、四書に加えた。

「凡人之所以為人者、礼儀也」「雖有至道、弗学不知其善也」「礼儀三百、威儀三千」「天子議礼」

「記問學不足以為人師」

*「春秋」春秋時代の歴史書。諸侯の政治、戦争、外交や自然災害について記されている。孔子の作。

「病入膏肓」「問鼎輕重」「衆怒難犯、專欲難成」

「孝経」儒教の根本理念で最高道徳の「孝」を天子、諸侯、大夫、士、庶民のケースにわけ、孔子が弟子に語った考えを集録したもの。

「其孝、始於事親、中於事君、終於立身」「其孝、徳之本也、教之所由生也」「立身行道、揚名於後世、以顯父母、孝之終也」

「春秋左伝」孔子の「春秋」の背景の史実を解説するとともに倫理道徳を説く書。

「人誰不過。過而能改、善莫大焉」「富而不驕者鮮。

驕而不亡者、未之有也」「衆怒難犯、專欲難成」

儒教道徳には、抽象面の道徳と具体的人間関係で捕える実践道徳の二面がある。抽象道徳は、人が身に付けるべき徳性は、「仁（おもいやり）、義（人のなすべきこと）、礼（礼儀作法）、智（学問、是非善悪の判断力）、信（約束を守る事）」で、孔子は、これを「五常」とした。

「仁」孔子が儒教の最高道徳と位置付けるもので、思いやりの心で万人を愛し調和を図り、利己心を抑え礼儀を執り行うことである。

《「克己復礼為仁」（論語顔淵篇）「己所不欲、勿施於人」

「夫仁者己欲而立人、己欲達而達人」（雍也篇）「温良仁之本也」（礼記）》

孔子は、この「仁」を「孝」につなげた。仁とは人と親しくすることであり、「愛」となる。この愛は、「孝」である。

「孝悌」こそが「仁の本」となる。

《「孝悌也者、其為仁之本与」（論語学而篇）》

「義」 社会秩序で利欲にとらわれず、なすべきことをする規範意識である。

《「父子親在、君臣義在」（孟子）「見義不為、無勇也」（論語為政篇）》

「礼」 謙讓の精神である。

《「凡人之所以為人者、礼儀也」（礼記）

「居上不寛、為礼不敬、吾何以觀之哉」（論語）》

「智」 学問および道徳的認識・判断する力である。

《「温故知新」「学而不思則罔、思而不学則殆」（論語）「雖有至道、弗学不知其善也」（礼記）》

「信」 仁・義・礼・智全てを内包する約束である。

《「居上克明、為下克忠、与人不求備、檢身若不及」（書経）「施諸己而不願、亦勿施於人」（中庸）

そして、具体的人間関係の中の実践道徳を「五輪」として、「父子の親」（父子の親愛の情）「君臣の義」（君臣の慈しみの心）「夫婦の別」（夫婦それぞれの役割）「長幼の序」（年長者を敬い従う）「朋友の信」（友人間の信頼の情）に分類する。この親子と君臣の両方に在る実践道徳が「忠・孝」で、極めて重要な価値観をも持つ。

《「父子之道天性也、君臣之義也」（孝経）「父子有親、君臣在義、夫婦有別、長幼有序、朋友有信」（孟子）》

孔子の言行録をまとめたものが「論語」である。その伝来は、「古事記」によれば、応神天皇（5～6世紀）の頃とされている。

朱子学は、南宋の儒学者朱熹の理気説を根本原理として、儒学を基礎に新たに体系化した学問で、ネオ儒学とも呼ばれる。理気説は、宇宙、万物の原理を「理」、物質・存在・運動を「気」とする「理気二元論」で、性（人間の本性）は理であるとする「性即理」及び上下関係の秩序を重視する「大儀名分論」等が、四書（大学、中庸、論語、孟子）等で説かれている**宇宙論・人生論・道徳論**である。

朱子学を学ぶにあたって、朱熹は、「小学」「近思録」を学習して、「四書」に進み、さらに「五経」を学ぶという学問の課程を示している。朱子学は、人間誰も手順を踏んで学問・努力すれば最高原理すなわち「窮理」に至ることができるとしている。ここに、人間は、精進・努力・学問をすれば、誰もが聖人になることができるとする学問の価値観・意義を認識することができる。「大学」八条目「格物・致知・誠意・正心・修身・齐家・治国・平天下」は、窮理への道で、聖人に至る道を教えている。「小学」宋代に朱熹が初学者用に纏めた修身・作法書。古聖

人の善行、箴言や人倫の実践的教訓（起床・洗顔・寝床整頓・掃除、挨拶、外出許諾・帰宅報告、年長者随行時の歩行、溫柔孝悌、恭敬尊長、忠臣不事二君、責善朋友道等）が説かれている。

「近思録」朱熹らが編纂した朱子学入門書。朱子学及び学び方、格物窮理、修己齐家・治国平天下、克己復礼、出所進退、先人の聖人・賢人などについて記されている。

《「威儀行儀、以養徳也」「学者道、内存己心然所。専己分限応、得其理近所」「推己及物、以養人也」「孟子曰、惻隱之心、仁也。後人遂以愛爲仁。」》

《四書》

*「論語」孔子の人生観、学問論、政治論、君子論、人間論、道徳律などに関わる哲学で、忠に基づく人間愛としての仁、孝悌、禮・知・信などにかかる哲学体系である。儒教哲学の真髄とされている。

「学而時習之、不亦悦乎」「巧言令色、鮮矣仁」「礼之用和為貴」「為政以德」「吾十有五而志乎学、五十而知天命」「温故而知新、可以為師矣」「里仁為美」「弟子入則孝、出則悌、謹而信、汎愛衆而親仁」「吾日三省吾身、為人謀而不忠乎、与朋友交而不信乎、伝不習乎」「見小利則大事不成」「夫子之道、忠恕而已矣」

*「大学」国を治める者は、学問を修めるとともに自己修養により徳を身に付ける。そのために「格物・致知」「誠意・正心」に心掛け「修身・齐家・治国・平天下」すなわち「修己治人」の政治の実現を説いている。朱熹は、徳（学問）のある王者が国を支配することが理想社会であるとしている。そのため、天子も士大夫ともに学問のある有徳者でなければならないとしている。（徳治政治＝学問の意義・有用性を説く）

「徳者本也、財者末也」「君子有大道、忠信以得之、驕泰以失之」「所蔵乎身不恕、而能諭諸人者、未之有也」「湯之盤銘曰、苟日新、日日新、又日新」

*「孟子」孔子の哲学を継承・発展させ、民および為政者に仁、誠、和、思いやり、慈しみ等の心の重要性を説いている。教育を普及し、道徳国家を実現する王道の理想を説いている。

「至誠而不動者未之有也」「天時不如地利、地利不如人和」「往者不追、来者不拒」「人本性善也」「無惻隱之心、非人也」「仰不愧天、俯不愧也」「惻隱心仁

端也」「仁之勝不仁猶水勝火」「以佚道使民、雖勞不怨」「天時不如地利、地利不如人和」

＊「中庸」感情が動く前の平静の状況を「中」とし、感情が動いても然るべき節度にあることを「和」すなわち「誠」とし、この調和・充実が成立すれば、人間世界、天地宇宙は理想の状態に収まるとする「誠」の経書である。

「忠恕違道不遠、施諸己而不願、亦勿施於人」「在上位不凌下、在下位不援上、正己而不求於人、則無怨」「莫見乎隱、莫蹟乎微。故君子慎其独也」

「修己治人」(大学章句序)

「上下正文の理」(林羅山)

儒教の理想的政治は、徳のある君子による統治すなわち「徳治政治」であった。この徳治政治の実現には、君子と君子を支える士大夫(官僚)が有徳の人間であることが必要十分条件であった。この高德の涵養が学問であり、経書の学びにより教養を身に付ける事で、徳の涵養が図られるという理論である。その学問が儒学であった。

《「為政以德」「学而不思則罔、思而不学則殆」「学以不止」「以德導之、以礼齊之」(孔子)「劳心者治人」(孟子)》

朱子学の日本伝来は、13世紀初頭であるが、18世紀中期、江戸幕府の官学となり、諸藩の藩校教育においても中核を担うようになる。

我が国では、長い下克上の世が明けて、江戸幕府の安定社会を迎え、武断政治から文治政治に代わる状況を受け、幕府及び各藩の指導層(将軍、幕臣、藩主、各藩、家臣)に徳治政治を担う上で学問、教養が求められ、儒学・朱子学を通して豊かな教養と見識を身につけることが指導者の必須条件となってきた。江戸時代、我が国には科挙試験こそなかったが、幕臣および家臣・藩士は、中国社会の士大夫でもあった。ここでは、「四書・五経」に代表される儒学・朱子学がリーダーの豊かな教養に基づく有徳の証になるのは、歴史の必定であった。

4 幕府の教育機関

応任の乱以来 100年の乱世を制した徳川家康は、1603年江戸に幕府を開いて幕藩体制を敷き、それまでの武断政策から儒学・朱子学の学問を奨励し、文治政策を志向する。家康から家綱まで四代にわたり侍講を勤めた林羅山は、1630年家光

から与えられた上野忍岡の屋敷地に朱子学の私塾を開き幕臣への朱子学教育を始めている。1632年、三代将軍家光から新たに与えられた土地に塾舎「先聖殿」を建て、儒学・朱子学教育を始めた。1690年、五代将軍綱吉は、この塾舎を湯島に移し、旗本・御家人などを教育する幕府の学問所とし、孔子生誕の地に因んで「昌平坂」と命名した。

1790年、「寛政異学の禁」により、「修己治人」「上下正文の理」を旨とする江戸朱子学は、官学となり、学問所は林家から切り離され、1797年、幕府直轄の儒学・漢学中心の教学機関として「昌平坂学問所」(昌平黌)が開校した。この学問所は、幕臣のみならず広く諸藩の留学藩士にも門戸を開き、全国から優秀な人材が集まった。留学藩士は、帰国して藩校の校長等、指導的立場に立ったことから、昌平黌の朱子学教育は、諸藩の模範的モデルとなった。

1791年、幕府は、漢方医学を教授する医学館を設置。

1860年、伊藤玄朴の種痘所を幕府直轄とし西洋医学所設置。

1863年、幕府医学所とする。明治になって東京帝国大学医学部に繋がる。

1793年、国史、律令、史料編纂を行う「和学講談所」を設置。

1854年、「講武所」を設置、のちの陸軍省に繋がる。

1855年、洋書・外交文書の翻訳を業務とする「蕃所調所」を設置、のちに「洋学所」「開成所」となり、維新後、東京帝国大学に繋がる。

5 藩校の成立と教育概要

諸藩における教育機関の藩校は、1700年代後半から増え始め、とりわけ、幕府の昌平坂学問所が開設される1800年代には、すべての藩で開校される。諸藩における藩士教育は、儒学に造詣の深い好学の備前岡山藩池田公や会津保科公、紀州徳川頼宣公のように開幕間もない1600年代前半にはじまるケースもあったが、多くは、農業経済困窮に伴う藩財政悪化、商品経済・貨幣経済の進展に伴う藩政の混乱等の社会的課題に適切に対応できる人材の育成と藩政への人材登用および社会体制維持の価値観の共有を目指して、江戸中期から後期にかけて開設されるものであった。そのため、学問の中心は、封建安定社会の構築を目指す「忠孝」「仁礼」「智信」等の倫理観・道徳観と君子・君臣の在り方、治政の在り方等、社会哲学を学ぶ儒学・朱子学であった。19世紀後半に入ると外国船来航や西洋文明(軍事、航海、造船、火器、蘭学)の伝播や内外情勢の緊迫化に対応して、自然科学や洋学を伝習

する藩校も多くなった。

幕末期、諸藩の数は、256(5支藩含む)に上る。時代の文治政策・徳治政策への転換に伴い、全ての藩で1以上の藩校が開設され、王政復古時には、その数は415校に上る。

これらの藩校の多くが、明治5年の「学制」以降、中等学校、医学校および大学教養課程につながり、我が国近代教育の大きな礎となるのである。

「紀州徳川家の祖頼宜(家康10男)は、父家康の寵愛と薫陶を受け、儒学・学問の重要性を深く認識し、紀州入国直後の1619年から学問を奨励し、永田善斎、李貞栄、名波活所ら当代一流の儒学者・朱子学を多数登用し、1635年以降には、藩士に彼らの家塾で学問をさせている。組織的な藩校教育は、吉宗の時代まで待たねばならないが、儒家の家塾で学ぶ教育としては、歴史的に最も古いものであろう。」(「近世紀州徳川家の教育と思想」木本毅)

藩校教育の歴史で、開幕わずか100年で、開校した早期の藩校は全国で、8校確認できる。

1600年代前半、岡山藩の花島教場(1641)は、藩校教育で最も古い歴史を誇り、後の岡山藩学校(1669)に繋がるものである。ここでは、儒学を最重点に学ぶとともに書学や算学に加えて武術鍛錬も行う文武両道の教育が施された。儒学に造詣が深く先見性・開明性の誉高い池田光政は、儒学者熊沢蕃山との思想的・学問的知見(経世済民(宋史)、仁義礼智信(論語))の共感から、儒学に基づく仁政の実現(「為政以德」(為政篇)「仁以為己任」(秦伯篇))を目指し、藩士教育の充実に取り組んだ。また、領民一般にも学問を積極的に奨励し、1670年、歴史上初の藩主による領民学校「閑谷学校」(郷塾)を開校し、レベルの高い儒学教育を行っている。その哲学は、「為君之道、必須先在百姓。」(貞観政要)および「百姓こそ国の基」(池田光正日記)の実現である。ここでは、地方に住む武士や他藩からの留学生も庶民に混じって学んだ。維新後は、県立閑谷中学校(1870—M10)に引き継がれている。

「諸藩に先駆けて藩校開設が行なわれたことは、藩主池田光政の学問的知見と見識によるものであるが、当時の藩内における宗教的対立(仏教寺院の淘汰・半減や日蓮宗不受不施派弾圧)も藩校・郷学の早期設立に至った一因であろう。」(「江戸時代人づくり風土記岡山」)

1600年代後半になると、会津藩の稽古堂(1664のちの日新館)、大村藩の集義館(1670)、岡山藩の閑谷郷校(1670)、西尾藩の文礼館(1681)、対馬藩の小学校(1685)、前橋藩の好古堂(1691)、芝村藩の遷喬館(1696)の7校が確認できる。

この時期は、徳川幕府成立間もなく、その権力体制の整備・充実の過程であるにも関わらず、諸藩に先駆けて藩校を開校したことには、それなりの理由と歴史的背景が見て取れる。

会津の藩祖保科正之は、二代將軍秀忠の四男で三代將軍家光は兄になる。家光没後は、四代將軍の後見役として幕府大老を務める徳川幕府本流の中核的存在であることから、家康公伝授の文治政策を果敢にまた諸藩に模範的・先導的に推進した。こうした好学のスタンスを反映して、会津藩では、1664年、儒学教育の場「稽古堂」(のちの「日新館」(1674))が諸藩に先駆けていち早く開校した。

大村藩は、18代当主大村純忠のキリシタン大名の流れ(隠れキリシタン事件(1657))を払拭して、幕府のキリスト教禁止令に恭順の意を表すため、他藩に先駆けて藩校「集義館」を設立(1670)し儒学・朱子学教育の徹底を図ろうとしたとされる。(「藩校に学ぶ」藁科政治)

1685年、対馬藩三代藩主宗義真は、藩士子弟の教育の場として、「小学校」を開校した。これは、当時対馬藩は、辺境の地故の地理的ハンデイキャップにも拘わらず、日朝貿易の独占と銀山開発で財政的に大いに潤い、そうした経済状況に対応する必要から、学問奨励がいち早く行われたと推察できる。

前橋藩5代藩主酒井忠挙は、生来学問好で、幕政を文治政策に舵切った会津藩祖保科正之(幕府大老)に傾倒し、儒学朱子学に精通していた。(「江戸時代人づくり風土記10群馬」)1682年、忠挙は藩主に就くと、儒教哲学に基づく法度「15条の戒め」を藩内に公布した。

1. 忠孝を尽くし、文を学び、武に励み、礼を重んじる。
2. 質素儉約に心がける。
3. 文武の芸に励む。

1691年、この「戒め」に基づき、藩校「好古堂」を開校し、儒学・朱子学教育の場とするとともに武術の稽古さらには儒教道徳も教授した。ここでの授業は、八歳から始まり、四書・五経の素読と儒教道徳に基づく躰教育が行われ15歳以上には、講釈による講義が行われた。

1700年代前半でも、藩校は、まだ少数である。前橋藩の求和堂(1700)、高松藩の講堂(1702)、岩村藩の文武所(1702)、佐伯藩の学問所(1704)、紀州藩の講積堂(1713)、壬生藩の学習館(1714)、綾部藩の進徳館(1715)、安志藩の学問所(1718)、萩藩の明倫館(1719)、唐津藩の盈科堂(1723)、郡山藩の総稽古所(1724)、広島藩の講学所(1725)、岡藩の輔仁堂(1726)、鳥山藩の学問所(1726)、園部藩の講堂(1729)、丸亀藩の正明館(1735)、仙台藩の養賢堂(1736)、高松藩の講堂(1737)、三田藩の国光館(1742)、大洲藩の止善書院明倫堂(1747)、宇和島藩の内徳館(1478)、姫路藩の好古堂(1749)の22校が確認できる。

1700年代後半になると96校が確認され、江戸後期の1800年代には、爆発的に増加、300校近くが確認できる。農業経済や商業経済の進展には、文字の読み書きや計算および関連する分野の知識・技術、道徳律の修得が求められることから教育の進展は歴史的必定でもある。

「江戸中期の頃になると、幕府および諸藩の財政危機(飢饉等に伴う社会的困窮と税収源)に伴う藩政改革と農業経済・商業経済の進展に対応できる行政能力が求められるとともに時勢打開の力量のための見識と知見を持つ指導者の育成が時代的要請となり、藩校の開設が急速に進展した。また、農業経済・商業経済が急速に発展するこの時期、全国の私塾や寺子屋の成立・普及も爆発的に進むことになる。」(「近世庶民教育史」乙竹岩造)

6 藩校における教育の内容及び教授法

藩校の教育は儒学・朱子学が中心で、教科書は、「四書(大学、中庸、論語、孟子)」「五経(易経、書経、詩経、礼記、春秋)」が主に採用され、入門書として「小学」「近思録」さらに「史記」「十八史略」「左氏伝」「孝経」等、様々な漢籍が使われた。教授法は、書籍の読み方を教える「素読」にはじまり、教員が漢籍を講義・解説する「講積」が続き、教員の指導のもと生徒が読みと解釈を行う「輪読」、さらには複数の者で研究・議論する「会読」が行われた。また、「松下村塾」のように教員に質問・問題提起をし、仲間と議論・問答を深め思想・哲学を確立する教育を目指すところも相当数に昇った。このような学習形態は、医学や和学、洋学の場合にも適用された。

《信濃国藩校の学習5形式》

- 1.素読・授読
- 2.講義・講積・聴講・弁
- 3.輪読・会読
- 4.独看・独見・独読
- 5.質問 (「藩校での学習の内容・方法の展開」稲垣忠彦)

《初学課業次第》(1882年)

- 1.素読＝童蒙ノ記憶シ易キ四書ヨリ始メ五経カ小学ニ移タカ便、諳誦スル程ニ至ルベシ。
- 2.講積＝四書ニヨリ繰返シテ構ズベシ。小学、詩書モ兼講ズベシ。
- 3.会読＝小学、十八史略、孔子家語等、読ミ質疑・議論シ…………。
- 4.輪講＝仲間ト四書、詩書等、分担シ講義シアウ。
- 5.独看＝潜心シテ読ミ不審紙ヲ貼ケ、師授ノ人ニ教ヲ乞フベシ。……朋友アラバ輩集マリテ討議シテ読ム益々宜シ。

(「藩校における学習内容・方法の展開」稲垣忠彦)

《洋学における学習形態》 適塾の場合(「福翁自伝」より)

ガラマチカ(蘭文法書)を素読を授ける傍ら講釈も聞かせ、読み終わると、次は、セインタキス(蘭語統語論)を同様のプロセスで教授し、蘭語が解せるようになると、蘭語の医書や物理書を会読させる。会読とは、10人なり15人をグループにして、学習範囲を決めて、読みと講釈をさせる。会読にあたっては、塾生は、学習発表範囲を写本し、塾所蔵のゾーフ(蘭和辞書)により、自学・自習して発表するものである。グループの会頭の評価に基づき、成績優秀者は、自力自習の研究に進むとともに塾頭の指導を受ける。その学問水準は、当代随一を誇るものであった。

試験は、年末に経籍や漢籍を読ませ解釈・問題点を問うとともに、漢文の論文をまとめさせたり詩文等を作成・発表させた。儒学のほかには、和学(国学、皇学)、筆道、算学、天文・暦学なども教授されるとともに江戸末期にかけては、洋学、軍事学、蘭学、医学、本草学等、幅広い専門教育も行われた。武芸教育は、兵学、武術一般、馬術、水術等、多面的な実技教育が行われ、文武両道の教育が奨励された。

7 近世教育を先導した藩校

1. 会津藩「日新館」

会津藩祖保科正之(二代將軍秀忠の四男)は、四代將軍家綱の後見人で幕府大老を勤める徳川幕府の屋台骨であるが、藩政においても法令と教育による治政を旨とする文治政策を積極的に推進した。正之は、当代随一の儒学者山崎闇齋を招き、本格的に儒学を学び、「家訓15条」を示し、藩士教育の基本哲学を示した。

《保科・会津家訓15条》(儒教哲学)

1. 將軍家に忠勤に励むこと。
2. 兄を敬い、弟を愛すべし。
3. 主君重んじ、法守るべし。
4. 武備怠るべからず。

1664年、正之の学問好きを反映して、儒教教育を行う学校「稽古堂」が開校した。庶民の作った学校としては我が国初である。ここでは、庶民のみならず藩士、僧侶、医師が「論語」等を学んだ。保科は、これに地租を免除するのみならず経費の補助金を交付する等、儒教教育を全面的に支援した。

1674年、二代藩主保科正経は、庶民とは別に藩士専用の学問所「郭内講所」を開校し、会津藩教学の祖山崎闇齋が「大学」「孝経」を講じている。

《大学》「欲治其国者、先齊其家、欲齊其家者、先修其身、欲修其身者、先正其心」「欲正其心者、先誠其意、欲誠其意者、先至其知」「修身・齊家・治国・平天下」
《孝経》「夫孝徳之本也、夫孝始於事親、中於事君、終於立身」
「故以孝事君則忠、以敬事長則純、忠純不失」

1799年、五代藩主松平容頌の時、藩校造営がはじまり、5年の歳月を経て1803年に開校した。校名を「苟日新、日日新、又日新」(大学)からとり「日新館」とした。

《「藩校規則・令条」1810(儒教の根本哲学)》

「孝悌を本とし...徳を成し...恭敬を主とし...徳業に励むこと。長幼の序専にし...礼し愛嬌の道失うべからず。童子訓(人としての生き方、礼節と心、親に孝、年長者に悌(朱熹「小学」)を説く会津の道德書)の趣會得し、六科糾則(学問極めた者は重用、浅き者は重用せず)に進み材徳を成し.....」

日新館は、8,000坪を超す広大な敷地に中央に聖堂(孔子廟、顔回像)を配し、前面に素読所、講釈所をはじめ神道方、和学所、雅楽方、数学方、天文方、医学寮、礼式などが置かれるとともに武道場、砲術場さらには我が国初の水練水馬池まで作り、今日の総合大学並みの教育施設である。藩校入学前は、藩士子弟は、自宅か寺子屋で「孝経」(孔子の「孝」の理念と由

縁)の素読をし、「什の掟」を学ぶ。

「什の掟」「年長者の言うことに背いてはなりません。卑怯な振舞をしてはなりません。弱い者をいじめはなりません。...ならぬことはならぬものです。」

全ての藩士子弟は、10歳になると日新館に入学が義務付けられ、素読所で「四書・五経」「孝経」「小学」「日新館童子訓」等を学んだ。

「日新館童子訓」藩主容頌の作、主君への忠や父母への孝を説く修身教科書。

この後、講釈所(大学)に進み、で儒学・朱子学を中心に習礼、習字、兵学、武術、和学、医学、神道、音楽、数学等を学ぶ総合教育が行われた。

「その教育レベルは、世界的に見ても極めてハイレベルで、現在の国立大学の教養レベルに比しても遜色のないほどのものであった。」(「教育制度論」木本毅)

「会津は、肥前佐賀藩とともに藩士の教育水準が最も高く、武勇においては、肥前を遥かに凌ぎ、薩摩と並んで江戸期二大強藩である。」(「歴史を紀行する」(司馬遼太郎))

そして、成績優秀な者には、江戸遊学が許され、帰国後は藩・藩校指導者に登用された。

徳川宗家に尽す会津藩の一途さ、藩主松平容保が情勢不利な中、敢然として京都守護職を受諾着任したこと、鳥羽伏見の戦いから奥羽・北越の戦い、函館五稜郭の戦いに至る長い戊辰戦争の歴史には、全て会津藩の一途なまでの儒教価値観を礎におく教育が大きく影響を及ぼしたとされる。

「教育理念に儒教を礎とする日新館の教育は、会津藩士の全員に浸透していた。徳川宗家と軌を一にして、御家門にして藩屏たる存在が凜として判然である。幕末に...御三家が宗家の継嗣争いで、醜い欲望を.....その中で、いかに会津松平家が、ただ一筋の道を貫いてきたかがわかる。日新館の教育が容頌の童子訓に代表されるように.....まっすぐな人間、恥を知る人間、思い遣りのある人間を育ててきたのは、他の多くの藩校の中で珍しいことである。.....国を思い、家を思う忠孝が.....もっと注目されてよい。両刀帯する責任.....常住坐臥、僅少の卑劣さも軽佻浮薄な振舞も恥とした。.....これこそ日新館の教育である。」(「日新館と白虎隊」早乙女貢)

「戊辰の悲劇は、童子訓が功利性や裏切りの知恵を教えなかったことにあるかも知れない。ある意味の純粹培養が裏目に

出たとも言える」(「日新館と白虎隊」早乙女貢)

2 仙台藩「養賢堂」

仙台藩主は、正宗以来代々学問に深い憧憬と関心の持ち主であったことが、教育を広く根づかせ、この地に「学都」を冠するにふさわしい歴史と伝統を育んできたものである。

1736年、仙台藩五代藩主伊達吉村は、学問所を開設した。開設にあたって、吉村は「身を修め、心を正し、正意に向かい、専ら人倫を明らかにし、忠孝を励まし、士風をおこすことを進めるように教育すべし」と儒教的価値観に基づく学問所心得を布告した。(伊達氏史料)

1760年、学問好きで儒学に造詣の深い七代藩主重村は、藩の学問所を城下の中央に移し、学問の奨励を通して、広く人材(指導者)の育成を図ることした。教育の中心をなす儒学・朱子学は、「論語」「孟子」「小学」等、四書五経の漢籍の会読および講解・講釈を中心に漢詩・漢文・和文・和歌の作成・発表および各分野の専門書の読解・所見発表であった。

1771年、学問所は、賢人の養成を期して「養賢堂」と改称され、学問は、「四書・五経」や「孝経」「小学」など儒学・朱子学を中心に歴史、天文、律暦、法律、書数等が講じられるとともに、医学講釈も行われた。我が国の医学教育として古い歴史を持つものである。

1817年、養賢堂から独立して、「医学校」が新設され、内科、外科、小児科、婦人科、眼科を開設し、同じ敷地内に「施薬所」も併設され診察と実習の場となった。

1822年、医学所は、仙台藩医学校蘭方医学所となった。我が国初期の西洋医学校であり、後世の東北帝国大学医学部に繋がるものである。

1800年代に入ると、蘭学とともにロシア船への対応として露学も取り入れられ、ペリー来航による開国前後には英学等、洋学研究にも取り組む等、仙台藩の教育は、時代の先端を走る教育であった。

1857年には、我が国初の洋式軍艦『開成丸』を建造する等、伊達藩は西洋技術・文明のトップ・ランナーになっている。

さらに、学問により広く庶民一般の教化も図るため、重村は、家塾や寺子屋の開設を積極的に援助・奨励した。例えば、庶民のための学問所「日講所」を養賢堂内に併設し、我が国初のロシア語・オランダ語および英語の学習所とし、この学問所は、維新後の宮城外国語学校に繋がっている。

藩校と寺子屋の中間的な機能で、地方在住の藩士や陪臣のために各地方に「郷校」が開設され、庶民にも開かれるものも少なくなかった。ここでの教育は、「大学」「孟子」「論語」等の素読(儒学・朱子学教育)を中心に国学や儒教価値観に則る倫理・道徳についても講じられ、武芸を学ぶところもあった。こうした教育水準の高い藩校教育は、維新後の第二高等学校や東北帝国大学の開設の礎になっていくものである。

藩校教育トップ・スリーを自負する佐賀藩九代藩主鍋島閑叟は、諸藩の藩校事情を調査して「全国的に隆盛を誇り、数学や洋学を含めて、教授しているのは、仙台の養賢堂である」と教育レベルの高さを称えている。(「藩校に学ぶ」藁科満治)

3 佐賀藩「弘道館」

佐賀藩は、1613年、35万7千石で発足する。二代藩主鍋島光茂に仕えた山本常朝の「葉隠聞書」(「武士道というは、死ぬことと見つけたり」)は、佐賀藩士のみならず諸藩の武士の精神的バックボーンとして、長く生き続けるものであった。

1691年、光茂は、城内に孔子を祀る聖堂を建て、儒学教育を始めた。当時、藩の財政状況は、農業の不振、自然災害、長崎港の警備等により、財政は破綻寸前の状況にあり、藩政をこの危機から救う改革を果敢に担う人材育成が喫緊の課題となっていた。こうしたことから、八代藩主鍋島治茂(閑叟)は、藩主に就くや、1781年、藩校「弘道館」を開設した。

十代藩主直正は、藩政改革をさらに断行し、役人を1/5に削減、徳政令(商人よりの借金大幅減額・放棄)の強行、小作料大幅免除による農政振興等を実施する一方、教育には惜しみなく予算と情熱を注いだ。

1840年、5400坪の広大な校地に講堂、蒙養舎、内生寮、外生寮、武芸場からなる文武両道の壮大な教育施設を完成させるとともに教育予算も一気に6倍に増額した。

授業は、四書(大学、論語、孟子、中庸)・五経(易経、書経、詩経、礼記、春秋)や国学、算術などが行われた。教授法は、素読、会読、講義・講釈、にとどまらず、藩主直正の指示で問答・談話・議論にまで発展させ思考・応用・表現力まで求めるものであった。

「江戸昌平覺で、佐賀弘道館出身の者は、議論すれば、他藩の者には、負けなかった。ただ、会津の日新館出身者だけは、弘道館のライバルであった。」(「日本の藩校」(奈良本辰也))

1834年、医学寮を1835年には、蘭学寮を開設するとともに1850年代には、西洋科学・技術や西洋軍事技術(反射炉、精

鍊所の築造、アームストロング砲、鉄砲の製造、蒸気船・西洋式帆船、蒸気機関・船の建造)の導入に努めるとともにオランダから牛痘ワクチンを輸入し緒方洪庵の適塾に分け与える等、我が国西洋近代科学技術のトップを走るまでになった。

4 加賀藩「明倫堂」

藩祖前田利家ははじめ歴代藩主は、学問を好み、藩士にも積極的に学問を奨励した。五代藩主綱紀は、水戸光圀を母方の叔父とし、光圀に負けない学術肌の藩主で、膨大な書籍の収集家でもあった。綱紀は、木下順庵や室鳩巢等、当代一流の儒学者を招き、学問の振興を図るとともに数十万点に及ぶ書籍を藩校教育の教材とした。

1792年、十一代藩主治脩は、兼六園横の広大な土地に「明倫堂」と「武学校」からなる藩校を開設した。この時期は、幕府で老中松平定信が「寛政異学の禁」を出し、学問の朱子学統一を図り、幕府直轄の学校「昌平坂学問所」(1797)を開いた時期でもあり、諸藩もこれに倣って藩校開設を進めた時期でもあった。

藩主治脩は、開校にあたり、「士農工商四民を教え導き武士も庶民とともに学ぶ」という進歩的・開明的な触書を出している。「市民教導」「土庶共学」の理念は、当時の藩校では、極めて進歩的で、全国でも10藩にも及ばず、加賀藩以前では、岡山藩、紀州藩、広島藩等、数藩しか確認できない。しかし、入学希望者が三千名に及んだため、直臣と陪臣のみしか入学できず、下級武士と庶民は、月一回の講書の日のみの受講が許された。明倫堂では、八歳から素読生が、四書・五経を中心に学んだが、15歳から23歳までは、生徒となりさらに学びを深めるとともに和学、医学、本草学、天文・暦学、算術、歴史、法律、習礼等も選択で学び、明倫堂の学問領域の多彩なことは、諸藩の中で群を抜くものであった。

授業形態は、講書(読み、大意、解釈、余論の純に講義)と会読(学生が順番に教科書を読み内容・解釈を行い、他の者が質疑を行い、全員で討議をする)である。

1794年、治脩公は、小松の町医師らの願い出による庶民の教育機関としての郷校「集義堂」の開設を許可し、四書・五経を中心に儒教教育をするとともに漢方医学や珠算も教授した。ここでは、小松在住の武士も受け入れられた。

幕末、蘭方医学が加賀に入り(1808)、文法書「英文鏡」(1840)が出版され、ペリー来航(1853)により鎖国政策が解かれると、西洋学の機運が爆発的に広がった。

1854年、藩は、洋式武学校「壮猶館」を建て、砲術を教える火術方、蘭語の翻訳方、大砲の鋳造方、ケミストリーの研究・教授の精密方がおかれて、洋学(蘭語、英語)、航海術、測量学、砲術、数学等を教授する教育・研究機関で、武学校というよりは西洋学の専門学校であった。

1868年、藩は、語学教育の重要性を認識し、洋学者黒川誠一郎が開いた私塾「英仏学塾所」を藩校として認め「道誠館」を開館した。ここでは、フランス語、英語、漢学、数学が教授され、本格的な外国語学校であった。後に「英学校」を経て「致遠館」となる。

幕末期、鎖国が解けて開国になると、庶民の教育熱は、一層の盛り上がりを見せ、1867年、庶民専用の教育機関「卯辰山集学所」が開設された。時節柄、庶民教育の重要性を認識していた加賀藩最後の藩主慶寧もこれを歓迎し援助もした。ここでは、四書・五経の素読・会読・講書の儒学・朱子学教育が中心で、加えて習字と算術も教授された。

明治維新を迎えると、新政府の学問奨励政策もあり、庶民の教育熱は一層高まり、地域の有力者たちにより、各地に郷校が盛んに作られ、明治5年の学制発布により近代教育に組み入れられ、加賀藩の教育は、日本の近代教育発展の大きな礎となるのであった。

維新後、前田家の寄贈により、地方都市なるも豊かな学風ゆえに、旧制第四高等学校がこの地に誕生するのである。加賀藩前田公の教育振興に果たした役割は、仙台藩伊達公(旧制第二高等学校、東北帝国大学)に並んで維新後の我が国近代教育の大きな礎となっている。

5 薩摩藩「造士館」

薩摩藩には、郷中という小集落の行政単位があり、ここでの社会教育システムを「郷中教育」という。1596年、秀吉の朝鮮出兵時の留守を守る郷中での取り決め「二才咄格式定目」が儒教道徳に則り作られた。「武芸に励み、山坂達者を心がけ、忠孝の道に背かず」武士の心得で、郷中教育の基準となるものであった。郷中教育では、二才(14~24才)が長稚児(11~13才)を指導し、長稚児は小稚児(6~10歳)を指導する。指導の内容は、体力づくりと読み物、道徳、武芸さらには軍書である。こうした地域社会の教育が、早くから確立されていたが故に、薩摩は、藩校開設が遅れたと言われている。

1773年、開明的・学術的、好学の誉高い八代藩主島津重豪が城内に儒教の聖堂（孔子廟）を中心に講堂、学寮、文庫からなる藩校「造士館」と「演武館」を開設した。

造士館では、学生は、八歳で入学し、「四書・五経」で儒学や「近思録」（宋学の入門書）で朱子学を中心に学ぶとともに和学や書道を学んだ。藩主自らも教授を招聘し儒学・朱子学を学ぶとともに造士館を訪れ督学にも心掛けた。「演武館」では、剣道、柔道、弓道、槍術、馬術が教授された。文武両道の教育である。

《造士館学生心得》（儒教哲学）

1. 講書は、四書五経、小学、近思録など……注解は程朱の説（朱熹）を主とする。
2. 礼儀ただしく学業に進むこと。
3. 才学長ずる者褒めすすむこと。
4. 末々の者たりとも、学問に志厚き者は、講義の席に加わること。（土庶共学）

重豪は、翌年「医学院」も開設し、漢方医学教育が行われた。

1779年、重豪は「天文館」を開設し、天文学や暦学の教育・研究が始め、幕府の「貞享暦」と並ぶ「薩摩暦」を編纂するほどであった。こうした状況に加えて、「四書・考経・春秋経伝」等おびたしい薩摩藩学蔵書が出版され、藩教育の施設・環境が大幅に充実した。

造士館の創設は、藩内多くの郷でも領主たちが、郷土の教育機関として「郷学」を設置することに繋がり、多くの郷学や学問所が開設された。教育内容は、造士館に準じて、「四書・五経」の儒学・朱子学が中心でほかに諸子百家（儒家、道家、墨家、法家など）の書籍や日本の歴史・詩文なども教授された。薩摩は、人口の四割近くを藩士と郷土で占めていたとされるから、藩全体の教育水準は、江戸と並ぶ、当代日本一であったと推察される。こうしたおびたしい郷校は、明治維新の近代教育の大きな礎になっていくのである。

造士館の教育の最盛期は、重豪に強い影響を受けた十一代藩主島津斉彬の御代である。欧米諸国の度重なる艦船来航や神奈川条約（1854）に伴う開国をはじめ緊迫する内外情勢に備えて、激動の社会情勢に対応できる人材の育成と産業振興が急務であると認識した斉彬は、諸施策を果敢に実行した。1854年、斉彬は造士館の教育方針を告示し、造士館教育の一層の充実を図った。

「修身、齐家、治国、平天下」（大学）の道理を極め、日本国の本義を明らかにし、国威を海外に発揚する。」

1852年、仙巖園「西洋科学研究所」反射炉建設、溶鋳炉建設（1854）、鉄砲・大砲製造（1856・1857）。

1851年「集成館」火薬、紡績、ガラス、製薬、印刷・出版、塩酸、電信電話、軍艦建造。

斉彬の集成館事業は、当代日本最高レベルの軍事力・工業力に到達し、西洋科学技術にもひけを取るものでないほど優れたものであった。

「（斉彬に）少しのお世辞もなく、見たものすべてに感嘆した」（集成館を見学したオランダ海軍将校カッテインデーケ談）

十二代藩主島津忠義の御代、薩英戦争（1863）で、西洋科学技術力の強力なことを認識した藩は、1864年西洋科学技術の総合研究・教育機関「開成所」開校し、英語、蘭語、洋式軍事、砲術、航海術、測量、天文、数学、物理、地理、医学の総合的な教授・研究を始めた。

1868年（M1）、造士館は、開成所を吸収・合併して、洋学、和学、漢学の三学局構成の総合的学問・研究所となった。維新後、島津家の寄付をもとに旧制鹿児島県立中学造士館、旧制第七高等学校造士館の設立に繋がるものである。

6 水戸藩「弘道館」

1657年、儒学・朱子学に造詣の深い二代藩主徳川光圀が江戸屋敷別邸で「大日本史」編纂事業（完成に2世紀半を要す、「明治大正までの間において、歴史の名に値する著述は、水戸の大日本史のみである。」（西田幾多郎））を始めるとともに藩士教育を始め、四書・五経など儒学・朱子学の講釈を行う。この場所を「彰光館」と命名した。（「彰往考來」（春秋左氏伝）のち藩士のみならず庶民の受講も許可する。

1838年、学問に造詣の深い九代藩主徳川斉昭は、「弘道館記」を公表。（「人能弘道、非道弘人」（論語衛霊公篇）

《弘道館記の重要項目》

- ①神儒一致（神皇に奉じ儒教これを助く）
- ②忠孝一致（父祖に孝即ち主君に忠）
- ③文武一致
- ④学問事業一致（教育成果政治に反映）
- ⑤治教一致（政治と教育の一致）

1841年、斉昭が城内54,000坪（日本最大（甲子園球場（11,646坪）の約5倍、2位は金沢明倫堂の17,800坪）の敷地にお手元金で「弘道館」を整備し、運営費は、学田の年貢米

収益を充当した。敷地中央には、孔子廟と鹿島神社を併置（神儒一致）し、文館と武館を両側に（文武一致）、東に天文方、西に医学館がおかれた。

入学は15歳で、30歳まで学び、31歳から40歳までの学習は、任意であった。文館に入ると儒学の経書（四書・五経）の会読に始まり、次に講読に移る。会読の次は、経書（論語、孟子、春秋左氏伝）を順次輪番で講読する。武館では、兵学、武術、砲術、火術などが伝授された。諸藩と同様、文武両道。1843年、斉昭は、構内に医学館「贊天堂」（「能尽物性、以贊天下化育」（中庸））が開設し、医師の養成に努めるとともに郷校の郷医の研修の場とした。ここでは、漢籍や医学書の会読・輪読のほか町医と郷医に医書の講読をする小会とそれぞれの学力を検分する大会も行われた。また、痘瘡の流行に西洋医学の種痘の実施も行われた。

同年、江戸藩邸にも学問所「江戸弘道館」が設けられた。ここでは、孝経、四書、五経、十八史略、左伝、史記、国学などの素読・会読・講読が行われた。

7 熊本肥後藩「時習館」

1632年、藩祖細川忠利が熊本藩に入府した。しかし、藩は、慢性的な財政難に喘いでいた。こうした惨状を打破すべく、六代藩主細川重賢は、商品経済、産業システム、税収改善、刑法改正等、様々な改革に組むとともに、人材育成の教育の充実を図るため「藩校」の開設に取り組んだ。

1754年、重賢は、城内に学問書を開設「時習館」とした。（「学而時習之」（論語学而篇））

ここでは、藩士の子弟のみならず陪臣さらには好学の庶民の子弟も入学を許された。生徒は7～8歳で入学すると、「孝経」（孝は徳のもと、教えの源）「四書・五経」の素読に取り組むとともに武芸にも励んだ。15～16歳になると「左伝」「史記」「漢書」などを学び、成績優秀者は、居寮生としてさらなる勉学が許され、扶持米が給された。重賢の教育への思い入れは強く、藩校経営の経費もすべて藩の費用で賄われ、時習館の充実には眼を見張るものがあった。「学生数も増加の一途で初級の句読齋は500人、上級の講堂生で約370人、居寮生も幕末には27人にも及ぶ盛況ぶりであった。武芸師範所でも500～600人、少ないところでも150人は下らないほどであった。」（「人づくり風土記熊本」）

こうして、重賢の時習館教育は、藩政充実だけでなく明治の近代日本成立にも大きな役割を果たす俊英が多く育った。

中山昌礼（時習館塾長、農政経済学者）、横井小南（幕府政治顧問、開明的思想家・教育者）元田永孚（明治天皇侍講）井上毅（教育勅語の起草）

「1756年、医学寮「再春館」が開設された。我が国最初の漢方医学校である。重賢は、「医は仁術とする、身分の高下区別なく入門を許可、学問第一を治療の基準」とする教育方針を示した。身分を問わない画期的な門戸開放に開校には、300名に及ぶ入門希望者が集まった。」（「人づくり風土記熊本」）

教育課程は、外科、眼科、小児科、産科、口科、鍼灸科、按摩科さらには解剖学、薬物学と漢方医学の総本山として大学総合病院並みの機能を果たし、後には外科に西洋医学も取り入れた。また、再春館と同時に「薬園」も創設され薬学の研究も進められた。明治になり、この薬園は、第五高等学校、そして戦後、熊本大学薬学部を引き継がれた。

1870(M3) 藩知事細川韶邦は、再春館を新たな洋式医学校とし、翌年、蘭医マンスフェルトを招き「古城医学校」を開校した。これにより、漢方医学の総本山としての再春館医学教育は、124年の歴史を閉じることとなった。

8 明治維新以降の近代公教育に見る儒学・朱子学の学術的価値観

1872年（明治5年）我が国近代公教育は、国民皆学を目指す「学制」の発布により始まった。それまで、幕府及び諸藩の学校で2世紀以上にわたって行われた儒学・朱子学を中心とする近世教育は、明治の近代教育に多大の影響を及ぼした。1879年(M12)、元田永孚（明治天皇侍講、朱子学者）は、儒教主義的皇国観に則る教育方針「教学聖旨」を勅語で発布した。教学聖旨は、「仁、義、忠、孝」を明らかにすることが教育の根本と示され、儒教道徳を「本」とし、知識・才芸を「末」とするものであった。

儒教道徳は、「修身」という教科で教授されることとなった。（教科名の由来は、「大学」の「修身・齐家・治国・平天下」に由来する。）

1881年「小学校教則綱領」が出され、「修身」が教科の筆頭に位置付けられた。そして、「小学校令施行規則」（1900年M33）で、小学校では、週2時間、中学校では1時間、高等女学校では、3年生まで2時間、4年以上は1時間教授されることになった。

教科「修身」の指導内容は、儒教道徳に則り、それぞれの徳目について歴史上の人物を通して編纂された。

《修身教科書》1904(M34)年以降 1945(S20)年までの国定修身教科書

(儒教価値観に則るシラバス)

- 内容1 素直な心を持つ。(正直、誠実、良心)
- 内容2 自分を慎む。(謙遜、質素、儉約、寛容、報恩、整理・整頓、健康)
- 内容3 礼儀を正しくする。(名誉、礼儀)
- 内容4 自分の行いを律する。(自己規律、自立、習慣、規則・時間を守る)
- 内容5 夢を持つ。(立志、進取、発明、興業、起業、職務勉勵、産業振興、間宮林蔵)
- 内容6 一生懸命働く。(勉学、正直、同情、師弟、孝行、職務精勵、勝海州、咸臨丸)
- 内容7 つらさを乗り越える。(自身、忍耐、克己)
- 内容8 困難に立ち向かう。(堪忍、勇氣、負けじ魂、高田屋嘉兵衛)
- 内容9 やるべきことを成し遂げる。(忠義、男女の勤め、約束、忠孝、佐久間艇長)
- 内容10 合理的精神を持つ。(男女の勤め、迷信)
- 内容11 ルールを守る。(規則、国法)
- 内容12 家族を尊ぶ。(家庭、父母、孝行、兄弟、悌、忠君愛国、恩師、松下村塾)
- 内容13 友達を大切にする。(朋友)
- 内容14 思いやりの心。(博愛、宮古島の人々、瓜生岩子)
- 内容15 力を合わせて。(協働、心ひとつに、焼けなかった町)
- 内容16 みんなのため。(公益、近江聖人、能久親王、岩谷九十老)
- 内容17 日本人として。(山田長政、ダバオ開拓)
- 内容18 美しく生きる。(万物の長、ふくしゅう)

《尋常小學修身書(三年生)文部省 1928(S3)年発行》

- 1.皇后陛下のやさしさ 2.忠君愛国 3.孝行 4.仕事に励む 5.学問 6.整頓 7.正直 8.師を敬う
- 9.友達 10.規則 11.行儀 12.勇氣 13.堪忍
- 14.物事にあわてるな 15.皇大神宮 16.祝日 17.儉約
- 18.慈善 19.報恩 20.寛大 21.健康 22.自分のもの人のもの 23.協働 24.助けあい 25.公益
- 26.生物の憐れみ 27.よい日本人 〈教育勅語〉

1890年(M23)、井上毅と元田永孚は、「教育二関スル勅語」を起草した。二人は、ともに熊本藩校時習館で、朱子学を学んだ政治家・学者であった。

「忠孝、孝悌、信、恭儉、博愛、学問、勤勞、智、徳器、遵法、義勇、祖先崇拜、皇運扶翼」等、儒教価値観に則る勅語。

《教育勅語》

朕惟フニ我カ皇祖皇宗國ヲ肇ムルコト宏遠ニ徳ヲ樹ツルコト深厚ナリ 我カ臣民克ク忠ニ克ク孝ニ億兆心ヲ一ニシテ世々厥ノ美ヲ濟セルハ此レ我カ國體ノ精華ニシテ教育ノ淵源亦實ニ此ニ存ス 爾臣民父母ニ孝ニ兄弟ニ友ニ夫婦相和シ朋友相信シ恭儉己レヲ持シ博愛衆ニ及ホシ學ヲ修メ業ヲ習ヒ以テ知能ヲ啓発シ徳器ヲ成就シ進テ公益ヲ廣メ世務ヲ開キ常ニ國憲ヲ重シ國法ニ遵ヒ一旦緩急アレハ義勇公ニ奉シ以テ天壤無窮ノ皇運ヲ扶翼スヘシ 是ノ如キハ獨リ朕カ忠良ノ臣民タルミナラス又以テ爾祖先ノ遺風ヲ顯彰スルニ足ラン 斯ノ道ハ實ニ我カ皇祖皇宗ノ遺訓ニシテ子孫臣民ノ俱ニ遵守スヘキ所之ヲ古今ニ通シテ謬ラス之ヲ中外ニ施シテ悖ラス 朕爾臣民ト俱ニ拳々服膺シテ咸其徳ヲ一ニセンコトヲ庶幾フ

明治23年 10月 30日

御名御璽

江戸時代、幕府の昌平黌や諸藩の藩校、郷校、及び私塾、寺子屋では、儒学・朱子学を中心とする漢籍教育が行われた。(その他には、国学、史学、暦学、天文学、和漢医学、薬草学、江戸後期から幕末には蘭学をはじめ様々な洋学(外国語、造船、航海、精練、溶鉱炉、軍事学等)も教授・研究されたが。)この漢籍教育は、維新後も漢学塾や家塾、家庭で、漢籍の素読指導が行なわれるとともに近代教育にも引き継がれ、中等教育では、国語漢文科、国語及び漢文科として、国語、数学、英語とともに主要必修教科として位置付けられ、「四書・五経」「史記」「司馬遷」「十八史略」「近体詩・古体詩」等が教材とされた。とりわけ、中国古典名文選「唐宋八大家文」(沈徳潜篇)は、漢籍教育の手本教材として明治以降も広く重用された。

《史記》「漢軍及諸侯兵、困之數重。夜聞漢軍四面皆楚歌」「項羽妬賢嫉能、有功者害之、賢者疑之。此所以失天下也。此三者皆人傑也、吾能用之。此吾所以取天下也。」「大行不顧細謹、大礼不辞小讓」「項王笑曰天亡我何渡為……吾為若徳、乃自刎而死」

《十八史略》「今王必欲致士、先從隗始。況賢於隗者、豈遠千里哉」「臣敢不竭股肱之力、効忠貞之節繼之以死」「人生如朝露、何自苦如此」「武留匈奴十九年。始以強

壯出、及還鬢髮尽白」

《唐宋八大家文》「博愛之謂仁。行而宜之、之謂義。由是而之焉、之謂道。足乎己、無待於外、之謂德。仁興義為定名。道興德為虛位。」「欲治其国者、先齊其家。欲齊其家者、先修其身。欲修其身者、先正其心。欲正其心者、先誠其意。」（韓愈）
「古之学者必有師。師者所以傳道受業解惑也。吾師道也。道之所存、師之所存也。」
「古之学者必有師。師者所以傳道受業解惑也。吾師道也。道之所在、師之所在也。」

漢籍は、1945年(S20)まで、教養教育の重要な一角をなし、政治家、経済人、文人、軍人の教養人の証ともなった。軍神乃木希典の漢詩(「金州城外の作」ほか200篇を超す漢詩)、西郷隆盛の詩才(偶成)「不為兒孫買美田」。後藤象二郎(偶成)「丹心許国死與生」。夏目漱石(七言絶句)「午院沈沈緑意寒、石前幽竹石間蘭」。大久保、伊藤、陸奥、鷗外、露伴、花袋、子規等も然り。

戦後、漢文は、高等学校で選択科目として履修されてきたが、1960(S35)年告示の学習指導要領で、漢文教育が必修科目(古文・漢文)として復活する。しかし、1999年(H11)告示の学習指導要領では、「国語総合」の中で、古文・漢文を学習することとなり、古典(古文・漢文)は、再び選択科目となる。2008年(H20)改訂の学習指導要領でも、必修科目は、「国語総合」であるが、多くの普通科高等学校では、「古典B」が選択必修として履修され古文学習とともに漢文学習が行われている。このように漢籍学習は今日まで脈々と受け継がれている。《高等学校学習指導要領》精選古典B(平成26年発行)

1. 小話六篇(十八史略、世説新語、先哲叢談)
2. 近体詩(唐詩三百首＝五言絶句・七言律詩、唐詩選、杜工部集、懷風藻、遠思樓詩鈔、漱石全集)
3. 史記(司馬遷の史書、太史公書、項羽本紀、高祖本紀)
4. 思想(論語＝陽貨篇・里仁篇・衛靈公篇・顔淵篇・学而篇・為政篇・憲問篇、慎思録、孟子、荀子、老子、莊子、韓非子、)
6. 小説1(世説新語、太平広記)
7. 詩2 古体詩(詩經、文選、陶淵明集、唐詩三百首、杜工部集、)
8. 文1 文二編(楚辭、古文真宝後集)

《世説新語》「漱石枕流」(劉義慶)

《先哲叢談》「自此後、果多生蛤、遂為名産。衆始服其遠慮。」(原善)

《唐詩三百首》「月落烏啼霜滿天、江楓漁火對愁眠、姑蘇城外寒山寺、夜半鐘聲到客船」(張繼)「昔人已乘黃鶴去、此地空余黃鶴樓、黃鶴一去不復返、白雲千載空悠悠」(崔顥)

《唐詩選》「朝辭白帝彩雲間、千里江陵一日還……輕舟已過萬重山」(李白)

《杜工部集》「昔聞洞庭水、今上岳陽樓、吳楚東南坼、乾坤日夜浮……」(杜甫)

9 まとめ

江戸時代250年に及ぶ幕府および諸藩の様々な教育機関で行なわれてきた儒学・朱子学を中心とする近世教育は、明治維新後の近代公教育にかなりの影響とインパクトを齎し、さらには戦後の教育にも根本的な理念・哲学にその痕跡を確認することができる。とりわけ、人として生きる上での哲学すなわち道徳律や価値観の形成に止まらず言語表現や生きる上でのよりどころとする格言や教えの中に、儒教哲学のよって立つものを見出すことができる。歴史的にマクロな視点で診ると、こうした漢籍(儒学)学習を通して、日本人の価値観・哲学・思想形成に大きな役割と影響を果たしてきた。儒学・朱子学の漢籍学習は、今日においても道徳価値観形成、思想等、あらゆる面に直接間接両面で大きな影響を及ぼしている。道徳的価値観・倫理観形成に「孝悌」「仁義」「忠恕」「礼智信」「誠実謙讓寛容」「立志精進」「学問の意義と価値」「修養の哲学」「人格形成」等、あらゆるフェーズにおいて、その健在が確認できる。また、言語表現においても、上述の儒教漢籍表現のいかに多くのものが我々の日々の生活の中に生きているか、例には、枚挙にいとまがない。(四面楚歌、五十歩百歩、切磋琢磨、病人膏肓、鼎軽重、巧言令色、温故知新、惻隱之情、往者不追、来者不拒……ほか)平素の何気ない会話、コミュニケーションの中に文化として生き続けている。儒学・朱子学が様々な面で、日本人の人格形成、価値観形成に生きている。

「儒教は、孔子以来2500年にもわたり(弘大な時空を)生き続けてきた。……儒教は、なぜかくも長い時間と広い空間を獲得できたのか。それは、歴代の政権が、その権力を維持する装置として利用し続けたということだけで済まされるもので

なく、儒教が、人間の心や社会の発する波長を捕えていたが故であろう。……儒教の名で語られた思想は多様であって、その多様な儒教の中には、現代に生命力を保持しうるものは(多く)存在するはずである。……儒教とても、孔子の教え、朱子学、陽明学、黄宗羲の儒学、清朝考証学、荻生徂徠ら江戸時代の古学等、一律でわりきれぬ豊饒な世界を持っているのであって、これらの中に現代が直面している問題を受け止める思想(哲学)は(十二分に)ありうる。(人間としての在り方・生き方の哲学)」「(儒教入門)(土田健次郎) ()内は筆者追記。

【参考文献】

「概説近代教育史」土屋忠雄(ま)編 川島書店 1991年3月
「教育史」田中克佳著 川島書店 2008年2月10日
「論語」貝塚茂樹 訳注 中央文庫 2011年7月30日
「孟子」貝塚茂樹 講談社学術文庫 2012年5月21日
「儒教入門」土田健次郎 東京大学出版会 2016年8月20日
「徳川日本の思想形成と儒教」佐久間正 ペリカン 2007年8月
「儒教が支えた明治維新」小島剛 晶正社 2017年11月
「儒教とは何か」加地伸行 中公新書 1990年10月25日
「日本の教育の原点—藩校に学ぶ」藁科満治 日本評論社 2018年4月30日
「会津藩校日新館と白虎隊」早乙女貢 新人物往来社 1981年10月1日
「仙台藩の学問と教育」大藤修 仙台江戸学実行委員会 1946年1月23日
「日本の藩校」奈良本辰也 淡交社 1970
「近世庶民教育史」乙竹岩造 目黒書店 1929
「日本学校史の研究」石川県 小学館 1960
「藩校時習館学入門」堤克彦 熊本郷土史譚研究所 2014年5月1日
「江戸時代人づくり風土記42長崎」農山漁村文化協会 1989年5月25日
「江戸時代人づくり風土記33岡山」農山漁村文化協会 1989年2月25日
「江戸時代人づくり風土記10群馬」農山漁村文化協会 1997年6月30日
「江戸時代人づくり風土記41佐賀」農山漁村文化協会 1995年2月25日

「江戸時代ひとづくり風土記4 宮城」農山漁村文化協会 1994年5月31日
「江戸時代人づくり風土記43熊本」農山漁村文化協会 1990年7月15日
「江戸時代人づくり風土記 46 鹿児島」農山漁村文化協会 1999年4月1日
「江戸時代人づくり風土記 8 茨城」農山漁村文化協会 1989年3月20日
「水戸弘道館小史」鈴木暎一 文眞堂 2003年6月5日
「国民の修身」渡部昇一 産経新聞出版 2013年9月8日
「尋常小學校修身書」八木秀次 小学館 2002年6月1日
「教育の制度と歴史」広岡義之 ミネルバ—書房 2009年2月
「フリー百科事典」儒学・朱子学 ウィキペディア 2018
「藩校における学習内容・方法の展開」稲垣忠彦 帝京大学文学部紀要教育学27 2002年
「国語科成立期における漢文教科書の推移 明治 41 漢文教科書」西岡智史ネット 2018年
「唐宋八大家文読本」星川清孝 明治図書 19763月5日
「精選古典B漢文編」東京書籍 2012年4月1日
「福翁自伝」福沢諭吉 岩波文庫 2011年2月4日
「教育学概論」木本毅 日本印刷出版 2017年4月1日
「教育制度論」木本毅 日本印刷出版 2017年4月1日
「紀州徳川家の教育」木本毅 2019年4月1日